京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.24

2012.6

（目次）

● 巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 研究科長　学部長　前平 泰志 ・・・・・・・・・・・・2

● 研究ノート

教員から ・・・・・・・・・・・・・・・ 臨床心理実践学講座　准教授　松下 姫歌 ・・・・・・・・・・・・3

院生から ・・・・・・・・・・・・・・・ 教育社会学講座　修士課程１年　佐々木 基裕 ・・・・・・・・・・・・3

● 社会人院生から ・・・・ 臨床実践指導学講座　博士後期課程２年　坂井　新 ・・・・・・・・・・・・4

● 留学生から ・・・・・・・・・・・・ 教育学講座　博士後期課程２年　李　芝映 ・・・・・・・・・・・・4

● 学部生から ・・・・・・・・・・・・・・・・ 現代教育基礎学系４回生　志方 洋介 ・・・・・・・・・・・・5

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育心理学系４回生　青木 祐子 ・・・・・・・・・・・・5

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 相関教育システム論系４回生　中込　栞 ・・・・・・・・・・・・5

● 附属臨床教育実践研究センターから

・・・ 臨床心理実践学講座　教授　附属臨床教育実践研究センター長　松木 邦裕 ・・・・・・・・・・・・6

● 教育実践コラボレーション・センターから

・・ 心理臨床学講座　教授　教育実践コラボレーション・センター長　桑原 知子 ・・・・・・・・・・・・6

● 博士課程教育リーディングプログラム グローバル生存学大学院連携プログラムから

・・・・・・・・・・・・・・・・ 臨床実践指導学講座　教授　副研究科長　皆藤　章 ・・・・・・・・・・・・7

● グローバルCOE事業完了報告・・ 教育認知心理学講座　教授　子安 増生 ・・・・・・・・・・・・7

● 事務室から ・・・・・・・・・・・・・・・・ 事務長補佐（兼会計掛長）　玉井 裕之 ・・・・・・・・・・・・8

● 図書室から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 図書掛長　奥野 雅子 ・・・・・・・・・・・・8

● 学部新入生アンケートから

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育学講座　准教授　学生委員長　駒込　武 ・・・・・・・・・・・・9

● “Kyoto University Academic Talk” 出演

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育学講座　准教授　山名　淳 ・・・・・・・・・・・・9

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 心理臨床学講座　教授　桑原 知子 ・・・・・・・・・・・・10

● 諸記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

巻頭言

人材を育てること

研究科長　学部長　前平泰志

本年4月から、辻本研究科長の後を受けて、教育学研究科長（教育学部長）に就任しました。私自身、このような要職にふさわしい人間かどうか、大いに戸惑っているところですが、選ばれた以上は、少しでも教育学研究科の発展のためにお役にたてればと願っています。ご挨拶を兼ねて、教育学研究科の現況をお知らせさせていただきます。

昨年、和歌山県教育委員会と本研究科・学部が連携協力に関する協定を締結しました。昨年度は、中学生や高校生を対象にした研修ツアーや出張講義、教職員のためのシンポジウムなど多彩な取り組みを実施しました。本年度も引き続き、すでにいくつかのプロジェクトが進行中です。本学でも大学入試の在り方をめぐって、議論の段階から、改革を推し進めなければならない段階にきていますが、その意味からも和歌山県との協定の締結は大変時宜にかなったものと思われます。

2004年の大学法人化以降、わが研究科は、辻本前研究科長も書かれていたように、（1）理論と実践の融合、（2）国際化、（3）卓越した若手研究者の養成、（4）教育／研究におけるフィールドの重視、の4つを柱にして改革に取り組んできました。

その推進役を果たしたのは、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際拠点」（教育学研究科拠点）と特別研究経費（教育改革）による「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」の2つのプログラムの活動でした。それらのプログラムは、教育学研究科の存在を学内外のみならず、国際的にも知らしめる大きな原動力になりました。

残念ながら、両プロジェクトともに本年3月で終了してしまいましたが、後者の方は、本研究科内に設置された「教育実践コラボレーション・センター」を中心に、その精神を継承すべく、今年度も鋭意活動中です。このセンターでは、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」の3つの教育研究ユニットを立ち上げて、それぞれ、学校現場での授業改善の研究開発、不登校児を対象とした学校での教員や生徒の教育と生活への関わり、廃校となった建物を拠点にした地域教育活動など、多彩な取り組みが展開されてきました。

その他にも、教員ばかりでなく、学生間で行う日・中・韓の国際共同研究やシンポジウム、E.FORUMというスクールリーダー養成の研修講座を行っており、本センターは、既設の「臨床教育実践研究センター」と並んで、社会連携や社会貢献の窓口になっています。

また、博士課程教育リーディングプログラムの1つとして採択された「グローバル生存学大学院連携プログラム」（平成23-29年度）に教育学研究科も参画し、学部や大学院を越えた取り組みにも積極的に応じています。

加えて、カリキュラムの中に「国際教育フロンティア」と「研究開発コロキアム」という科目を両プロジェクト発足の前後から開講してきましたが、両科目ともしっかり根を張ってきたようです。「国際教育フロンティア」は、海外からの研究者を招き、専任の教員と協働して最先端の授業を行っていただく授業です。教授言語は、主として英語ですが、教員からの一方向的な講義に終わらずに、学生からの活発な質疑応答もあって、学生には大変好評です。他方、「研究開発コロキアム」は、教育学研究科の大学院生が主体になって、研究課題を設定し、共同研究に取り組むものです。正規の授業時間割に組み込まれているので、単位の取得も可能になっています。

最後になりましたが、わが教育学研究科は、学校教育だけを教育とみなす考えから相対的に自由になっていることを主張しておきたいと思います。もちろん、学校は、現代において、なお担うべき重要な教育機関のひとつであることは間違いなく、本学においても、教育学部が全学の教職委員会の責任部局となっています。一昨年の夏には、東大の教育学部と共催で「学校の先生という仕事」というシンポジウムを開催して、少しでも本学の学生が教職に関心を持ってもらうように努めています。教員養成の世界も近年大きく変貌しつつある現代ですが、質の高い教員を輩出することもわが学部の使命のひとつであることは、昔も今も変わりのない確かなことです。

けれども、学校以外にも広い意味での教育を担う現場＝フィールドはたくさんあります。むしろ、すべての現場は教育の現場であるといってもよいほどです。そのようなフィールドのなかにわけ入っていく高度な専門人を養成すること　――そのなかにはもちろんその広い意味での教育を研究する研究者も含まれます――　が、私たちに要請されています。グローバルな人材の養成が声高に求められる今日ですが、どのような世界に入って行っても通用する人材こそ、わが学部、研究科が育てるべき人材であることを確信しています。

研　究　ノ　ー　ト

教　員　か　ら

臨床心理実践学講座　准教授　　松　下　姫　歌

2011年に京都大学に着任早々、産休と育休を頂き、この4月に仕事に復帰させていただきました。育児と仕事がよい形で両立できるよう、ただいま奮闘模索中です。これまで様々な現場で臨床心理士として仕事をしてきましたが、その中で多くの「お母さん」達にもお会いしてきました。このたび、命を授かり育むという経験に恵まれて初めて、「母親」になるということの内実を知り始めるにつれ、お会いしてきたお母さん達の顔が次々に浮かび、「あの時仰っていたことはこういうことだったのかな…」「向き合っているつもりで分かってなかったな…」と、あらためて、お母さん達への尊敬の念を強めているところです。

数年前、中国地方の助産師の方々と共同で、初産婦の方を対象に母性にまつわる心理的体験のプロセスについて研究しました。妊娠前、妊娠初期、妊娠中期、妊娠後期、分娩時、産褥期の心理的体験について半構造化面接を行ったのですが、妊娠出産体験を細かい時期にわけ、体験から比較的日の浅い段階で面接を行った点がこの研究の特徴の一つです。その結果、まず、妊娠前の心理的構えに関わらず、中期の「胎動」体験が、子を授かった実感や子への思いにつながることが明らかになりました。また、妊娠前の心理的構えと産後の子への思いや生命観とはリニアな関係になく、個人差が大きいこと、個々の人生を凝縮・再編するような体験をしていることが見出されました。例えば、もともと子を望まず、超音波検査で妊娠を確認した時もピンとこなかった人でも、中期の胎動で子への思いが芽生え、実感を増した分、後期には産む痛みへの怖さを覚えるといった揺れ動きを経て、分娩中の痛みに「価値」と「子の存在と親になる実感」を見出し、自らや子に宿る「生命」の感覚や「生きていく」感覚が更新される体験をしている、といったことが見えてきました。

研究を経て、助産師の方々が「長くお産に関わってきたが、妊婦の方が様々に揺れ動きながら深い体験をしていることを初めて知った」とおっしゃったのが印象的でした。今後、孤独に陥りやすいと考えられる、乳児を抱える母親の心理についてサポートに必要な研究を続けていければと考えています。

院　生　か　ら

教育社会学講座　修士課程1年　　佐々木基裕

この春から大学院生としての生活が始まりました。期待と不安が入り混じる感情は学部に入学した時と似ているなと感じますが、異なる点も多くあります。その最大の原因は大学院生という身分の不安定さにあります。大学に学費を払っている以上学生であり、所定の単位を履修して修士論文を上梓した上で、修士号が授与されます。しかし大学院生は同時に研究者の卵としての側面も持ち合わせています。学術において、ひいては社会にとって何らか新たな貢献をすることが求められます。

私は1970年代の現代思想と学生文化との関係を社会学の方法を用いて研究しています。アカデミズムにおいて制度的な正統性を確立できていない領域に、当時大学院生あるいは若手の大学教員であった人々が見出していた可能性あるいは情熱と、研究者として独り立ちするための実際的な要請との間でのバランス・力学に焦点を当てています。研究対象として客観的な距離化が必要である一方、時代は異なりますが同じような状況に立たされている彼ら・彼女らに自分自身の立ち位置を重ねて見ずにはいられません。

いま大学が置かれる状況を俯瞰すれば、むしろ現在の大学院生の方が厳しい状況に立たされているともいえます。少子化の趨勢は今後数十年にわたって続くことが予想され、研究者としての就職口は目減りする一方です。政策動向により金銭的な援助も低落傾向にあります。

自らの信じる学問的な理想は当然持ちつつ、しかしそうした社会的状況に敏感でなければ社会的に有用かつ評価される研究を行うことはできません。数十年後に後輩たちが我々の姿を振り返った時に、今行われている研究と2010年代の状況との接続点を見出してもらえるような、真にアクチュアルな研究を行えるよう努力していきたいと思っています。

社　会　人　院　生　か　ら

臨床実践指導学講座　博士後期課程2年　坂　井　　新

思えば、臨床実践指導学講座への入学は、東日本大震災直後の時期でした。長年臨床現場での援助をしてきた者として、その時期の入学に、躊躇と、とまどいがあったのを覚えています。なぜなら私自身、心理臨床の世界に飛び込む一因に、阪神・淡路大震災の体験があったからです。

日頃の心理臨床の実践と指導のうちに、何か物足りないものを感じ、もう一度自分が成してきたことを見直そうという気持ちで入学を志望しました。そんな中、東日本大震災が起こり、今こそ培った経験を生かす必要があるのではないか、当然入学すれば職場と講座での活動や研究に追われることとなり、支援や援助は無理なのではないか、と自問自答したのです。

今では、このような思いは杞憂に終わりました。もちろん現場に出向く実践的支援は、全く不可能でした。しかし昨年度の自らの心身の状態を振り返ると、事例検討・ゼミ、そして院生同士のコミュニケーションや高次元な知的刺激を通して、今まで構築してきた癖のある硬い内的枠組みを一度解体し、新たな柔らかな枠組みへと作り直していく過程であったように思います。いわば現在私はリハビリ中でもあり、どうやらその必要があったようです。このようなリハビリが必要である者に、過酷な現場での本当の援助や支援が、いったいどれほどできたのかという思いです。そういう意味では、できないモノを我慢しながら打って出る時機を待つことを、自らの身をもって学ぶ場と時間になっていたと思えてなりません。

京都大学でも、昨年度、「こころの支援室」が立ち上がり、今後被災者支援も本格化していくでしょう。これまでの臨床経験を基にして、研究の場からの支援とはいかなるものなのかと思い悩みながら、日頃の実践・研究と並行して関わっていきたいと思っています。それこそが、この講座に、このタイミングで入学した意味なのではないかと再確認し、残りの時間を充実したものにしたいと考えています。

留　学　生　か　ら

教育学講座　博士後期課程2年　李　　芝　映

2007年に研究生として韓国より来学して以来、本学で6度目の春を迎えることとなりました。現在は、本研究科の教育学講座博士後期課程に在籍し、近世教育史・思想史を専攻しています。特に京都を舞台として活躍した伊藤仁斎を中心に、江戸時代の儒者たちの知的営みのもっていた意味を明らかにすべく、日夜研究に励んでいます。

韓国と日本は隣国同士ではありますが、複雑な歴史的経緯もあり、かつお互いに似ているようで違うためか、かえって理解の難しい関係にあります。私は自らの研究を通じて、朱子学が絶対的な地位を持った韓国の朝鮮時代と、そうではなかった日本の江戸時代の思想空間を比較することで、他者としての日本と韓国に対する理解がより深まる一助となることを期待しています。

しかし、日々痛感するのは、何より世の中を変えていくのが、人と人との出会いだということです。私は、研究の傍ら、京都市教育委員会が主催している「土曜日コリア教室」で、京都の小学生たちに韓国語を教えています。参加者には、在日コリアンの子どもだけでなく、日本人の小学生も多かったことに驚かされました。KARAや少女時代など、いわゆる“韓流”に接した子どもたちやその家族が、韓国に興味を持つようになり、「土曜日コリア教室」に参加するようになったとのこと。「KARAが好きです！　将来韓国語の通訳さんになりたいです」という子どもと接しながら、人との出会い、好きという感情がいかに大事か、ということを切に実感しました。今まで私が留学生活を送ってこられたのも、色々な方々に助けてもらったからこそと思います。皆さんへの感謝の気持ちがまた、他の人を助けるように私を導いてゆく。韓国人か日本人かといった、そんな違い以前にある出会いによって始まる因縁を大切にしていくことが、韓日の相互理解を深める一歩ではないかと思います。のこる2年間、京都で出来た人々との出会いを大切にしつづけたいと思います。

学　部　生　か　ら

現代教育基礎学系
4回生

志　方　洋　介

学部生活も残すところあと一年弱となりました。ラストスパートをかけるべきところで後ろを振り返るのはおかしな話かも知れませんが、回り道ばかりしてきた様に思えます。

大学に入ってからというもの、学に志す側ら所属しているオーケストラにかなりの心血を注いできました。「大学は勉学の場である!」と叱責を受けそうではありますが、私にとってそこは所謂勉学と同じか、それ以上に学ぶこと多き場であった様に感じます。そしてそれは私が教育学部という場に居たからこそ感じ得たことである、とも思えるのです。

京都大学教育学部という場所は日常的な事柄に対する感覚を磨くには大変に良い環境です。同期の友人の鋭い視点に驚くこともありますし、先生方の言葉の端々には深い思索が窺えます。最近では、早く良い眼差しを得たい! というのが私の専らの願いです。

「生きているうちに何かを成さねばならぬ」と言う人がいますが、何かを成す前にも私たちは生きているのですから、その間に出会える多くのものにもっと思いを馳せたいと思っています。残り少ない学部生活、更に良き出会いを得て様々な方に支えられながら、回り道が一つの大きな流れになれば良いなと思っています。

教育心理学系
4回生

青　木　祐　子

中高生の頃に対人関係や自分の性格について悩んだことから人の心に関心を持ち、精神分析やカウンセリングについて学んでみたいと考えて教育学部に入りました。

当初は心理学系の中でも臨床心理学を学びたいという思い一つで講義や実習を受けていたのですが、先輩の勧めで認知心理学のゼミにも参加してみました。大学院生と一緒に1年間研究をするというもので、私のゼミでは乳児の発達能力について実験を行いました。それがとても面白かったのです。

この経験もあり、卒業論文では認知心理学の分野でテーマを決めることにしました。笑顔を表出することの効果について実験をして調べたいと考えています。高い専門性をもった教授や大学院生と話すことはとても刺激的です。

同級生や先輩、教授など多くの教育学部の人と話すようになって思うことは、一見関心事の異なる人でも、「人に関心がある」という部分は共通するのだなということです。少し足を伸ばすだけで同志の輪が広がるこの環境は恵まれたものであり、感謝しています。年齢を問わず教育学部の人とのつながりが深まってきたことがとても楽しいです。卒業してもこのつながりを大切にし、活かしていきたいと思います。

相関教育システム論系
4回生

中　込　　栞

教育学部に入学して、早いものでもう4年目となりました。私は司書と教員免許の取得を目指しており、同学年の友人と授業が被ることは少ないです。しかし、何かの機会で会うと、久しぶりにも関わらず、学びのことやサークル活動のこと、そして将来のことなど気を置かずに話すことができます。皆それぞれの専攻で頑張っており、私とはまた別の視点、分野から話をしてくれます。

入学する前は皆同じ“教育”と漠然と思っていましたが、今までの3年間を通して、友人たちと関わり授業の中で、同じ教育でも、本当に多様な視点があることを学びました。私は、中学生のときのとある体験から、行政は教育に対して何が出来るのかということを考えたくて、教育に興味を持ちました。現在、図書館行政について学ぶため、教育行政学と図書館情報学の2つのゼミに出席しており、そこでも視点の違いを実感しています。この1年は、これまでに学んだ考え方の広がりの中から、自分なりの視点を見つけ、それを形にする1年だと思います。多くの友人、幅広い知識を持ち、アドバイスをくださる先生方、先輩方に恵まれていることに感謝しつつ、納得のいくものが書けるよう、頑張っていきたいと思います。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座　教授　附属臨床教育実践研究センター長　松木邦裕

初めに、松下姫歌准教授が2011年4月1日付で着任されていますことをご紹介いたします。着任後、出産・育児等のためお休みでしたが、4月から本格的に教育・研究活動を始められました。松下先生のこれからのご活躍を皆がおおいに期待し楽しみにしています。

続いて、心理教育相談室の現況、2月に開催されたリカレント教育講座、そして東日本大震災に向けた「こころの支援室」の活動を報告いたします。

市民に開かれた臨床実践活動である心理教育相談室の2011年1月から12月までの総面接回数は約4400時間でした。面接時間は一回50分間、多くが毎週か隔週の定期面接という設定で、子どものプレイセラピー、親コンサルテーション等を含めて実施しています。相談件数は350件、新規相談申し込みは、心理検査を併せて100件です。現代社会の悩むこころへの援助の最前線がここにあります。

本年（2012年）の2月10日と11日にリカレント教育講座を開催しました。第15回目となる今回のテーマは「不登校・多動・非行―教師への支援―」です。プログラムは、事例検討「対応に困る子どもたちへの多面的理解と関わり」を四つの分科会で行い、二日目はシンポジウム「教師のメンタルヘルス」と題し、精神科医、臨床心理士、教師といった異なる職種のシンポジストが発表されました。今学校では、教師はかつてない多様な困難に直面しています。参加者は熱心に聞き入るとともに、参加者全員による討論では建設的な意見が飛び交う充実した学びの二日間が持たれました。なお、来年度は参加者の利便性を考え、本年8月の開催を予定し準備を進めています。

昨年3月の東日本大震災を受け、センター内に「こころの支援室」（室長 皆藤章教授）を開設し、この一年、教員、学生が力を合わせ、積極的な支援活動を行いました。電話相談、関西圏の避難者に向けた他部局との合同での天文台や博物館を活用した家族支援、講演会、シンポジウム等を実施しました。私たちにできることは、まだまだたくさんあります。さらに充実した支援を推し進めようと新たな計画を推進中です。

教育実践コラボレーション・センターから

いかにして「コラボ」していけるのか

教育実践コラボレーション・センター長　桑原知子

平成19年度から、「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」が立ち上げられ、教育実践コラボレーション・センターとして、さまざまな活動をおこなってまいりました。この間、関係各団体や諸方面の方々には、並々ならぬご尽力を賜りましたことを、この場を借りまして、こころよりお礼申し上げます。

「事業」としての期間は完了し、今年度からは、試みではなく、日常的な実践としてその活動を行っていくことになりました。つまり、これまでに築かれてきたさまざまな関係性をそのまま継承し、一過性の試みに終わることなく根付かせていくことが、これからのコラボレーション・センターに課せられた使命かと思っております。

教育現場のみならず、家族・職場など、私たちが日々活動し、生きている「場」は、いつも「コラボ」を必要としていると思いますが、この「コラボ」はそう簡単なものではありません。それは、コラボしようとする「二つのもの」は往々にして矛盾していたり、両立させることが難しいことだからです。たとえば、不登校を例にとると、教師は、その子の「有能性」を伸ばすことを念頭におくとき、「ぜひ学校に来てほしい」と願うでしょう。しかし、そうした登校だけが子どもためになるのではなく、この不登校という現象を通じて、子どもがその「生命性」を培い、これから先の長い人生をたどっていくための培養のときを送っているのだとすれば、登校刺激だけが子どものためになるのではないことも、今の教師はよく知っています。そうして、教師は悩み苦しみ、対応にまどうのです。

では、どうすれば「コラボ」できるのか？ それに対する「一つ」の答えがあるわけではないように思います。しかし、子どもに関わる大人がそこから逃げることなく葛藤することで、関わる人の「個性」が立ち現われ、また、子どもは、そうした大人が使う「エネルギー」を感じ取っていくのではないでしょうか？ 当センターが、そうした困難な課題に取り組むうえで、少しでもお役にたてれば、と願っております。

博士課程教育リーディングプログラム
グローバル生存学大学院連携プログラムから

臨床実践指導学講座　教授　副研究科長　皆藤　章

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、科学技術が万能ではないことを全世界に知らしめる結果となりましたが、同時に新たな人間の知恵が求められる状況をももたらしました。現代の地球社会は、①巨大自然災害、②突発的人為災害・事故、③環境劣化・感染症などの地域環境変動、④食料安全保障、といった危険に直面しています。このような状況に人類はいかに向き合おうとするのでしょうか。この壮大とも言える課題に正面から対峙する学問領域として「グローバル生存学」が創設されました。

教育学研究科では、このたび、この「グローバル生存学大学院連携プログラム」に参画することとなりました。京都大学は、人文社会科学と自然科学の共同における長い経験と実績を有していますが、それに基づいて、教育学研究科を含む人文社会科学系と自然科学系合わせて12部局が「グローバル生存学」に参画しています。

人類そして地球の生存を考えることはわれわれの時代の使命とも言えるでしょう。教育学研究科は、「教育」という位置からこの使命に応えようとしてきた歴史があります。それは何より、人格の教育であったと思います。たしかな知識と技術をもち、グローバルな視野で人間の営みを見つめ、必要な道を切り開いてゆく。そのような人材を育成しようとしてきました。このような歴史を継承してきた教育学研究科は、グローバル生存学大学院連携プログラムにおいても重要な役割を期待されています。それは、このプログラムの目的が、グローバル生存学の領域で世界的に活動できる人材の育成にあるからです。教育学研究科は、人類が直面する危機を乗り越えて人間社会をこころ豊かで創造的なものにし、その安寧に貢献する使命感・倫理観あふれる人材、自らの専門性に加えて幅広い視野と知識・知恵によって的確な道を切り開くことのできる判断力・行動力を備えた人材を育成しようとするグローバル生存学という新たな学際領域において貴重な役割を担っていると言えるでしょう。グローバル生存学大学院連携プログラムにおける教育学研究科の活動をぜひご期待ください。

グローバルＣＯＥ事業完了報告

教育認知心理学講座　教授　子安増生

「心が活きる教育のための国際的拠点」は、平成19年6月より活動を開始し、各種の研究・教育と人材支援等の活動を実施し、平成23年12月に総括シンポジウムを開催した後、平成24年3月末をもってすべての事業を完了した。

活動期間は、応募準備作業を含めると6年間近くの歳月にわたり、参加部局は、教育学研究科、高等教育研究開発推進センター、文学研究科、人間・環境学研究科、こころの未来研究センター、野生動物研究センター、および霊長類研究所（協力部局）と広範囲にわたり、5年間の総事業費は5億3377万7千円（直接経費）という文系としては超ビッグ・プロジェクトとなった。

拠点の運営には、部局と分野のバランスを考慮して選定した7人の執行委員があたり、執行委員会が通算57回開催され、重要事項を合議で決定していった。また、ＧＣＯＥ助教と同研究員は運営の実務に協力した。

研究面では、A～Dの4ユニットに分かれて、個別研究と共同研究を実施した。また、拠点全体のテーマとして幸福感の国際比較調査（13カ国）を行い、『幸福感国際比較調査報告書』を刊行した。

教育面では、修士課程1年生を主要な受講対象として「EXラボ」を毎年5プログラムほど実施した。また、外国人講師が実施する外国語による授業科目「国際教育研究フロンティア」を開講した。

人材育成面では、20～30代助教を対象とする若手教員支援研究費、博士課程院生対象の海外留学資金、大学院養成プログラム研究費、研究開発コロキアムの4つの人材養成プログラムを公募して実施した。

この5年間、本拠点の活動に活発に参画し、多くの貴重な成果を残した拠点の教員、大学院生、ポスドクの皆さま、ならびに様ざまなご支援をいただいた事務員の皆さまに、ここに心より感謝の意を表したい。尾池和夫前総長、松本紘現総長、吉川潔理事ほか京都大学の執行部の先生方、ならびに事務部門の方々にも厚く御礼を申し上げる。

事　務　室　か　ら

事務長補佐（兼会計掛長）　玉　井　裕　之

この4月からお世話になり、早1ヶ月が経ちました。3月4月は異動時期と決算時期が重なり、あらゆる人が多忙な時です。時間は皆に平等ですが、この時期は毎年、本当に時間（仕事？）に追われる状況となります。その4月に教育学研究科に異動となり、早速に先生方・事務長を始め皆さんに、色々とご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。皆様のご協力により、何とか決算時期を乗り切れたと感謝するとともに、ホッとしているのが正直な気持ちです。これからは、新年度に向けて新（珍?）体制で進んで参る所存です。

ご承知のとおり、平成24年度は事務改革の年です。この本部構内でも文系4研究科及び2研究所、総合博物館等を対象とした共通事務組織の設置が検討されております。これは、事務の効率化・集約化の推進を第一の目的としております。「事務改革」なるものは、規模の大小はありますが従前より行われてきており、当初期待していたほどの効果の出なかったものも少なくは無いと思います。今回の京都大学挙げての「事務改革」が改善につながる「真の改革」になるためには、これまでの事例も踏まえ、我々職員が知恵を出し、汗をかき、また、個々のスキルを向上させなければならないと考えています。

教育学研究科は比較的小規模な部局です。しかしながら、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」で、教育だからこそできる、存在感を出していければと考えております。

教員や学生に対するサービス低下を招くことなく、事務の効率化・集約化は大変難しいものがあると思いますが、これからは、今回の事務改革を契機に、本当の意味での「教職協働」による、よりよい大学組織を構築出来るよう、微力ですが努めて行きたく思っております。

今後も色々とご迷惑、ご面倒をおかけするかと思いますが、ご理解・ご協力の程、よろしくお願いいたします。

図　書　室　か　ら

図書掛長　奥　野　雅　子

この4月に着任したばかりなので、ここ教育学部図書室の魅力について語ってみようと思います。

参考にしようと、昔の News Letter をつらつらと読んでおりますと、棚の上にまで本が並べられたり、雑誌を年代で区切り分散して配架したり、書庫の狭隘化による先人の苦労が忍ばれる内容でした。この苦難については『京都大学教育学部六十年史』p.130から始まる“図書室の20年”にも詳しく記述されています。

ようやく教育学部本館耐震改修工事にともない図書室が広くなることになったのですが、今度は工事中により資料を一部梱包・出納制にして利用に供することになり、当時の利用者の方々にはさぞかしご迷惑をおかけしたことでしょう。

さて、時は流れて2012年、教育学部図書室の現在は? といいますと、様々な場所に分散配置を余儀なくされていた教育学部図書室所蔵資料群がその歴史始まって以来、初めて一堂に会しております。その階をまたがず、1フロアに約16万冊もの資料がひとかたまりで配架され、その9割が開架式、つまり資料を自由に手にとって見ることができるスタイルは、京大に数多ある図書館・室の中でも、とても珍しいのではないでしょうか。

蔵書構成としては、370番台=教育学関係は言わずもがな、140番台の心理学、010番台の図書館学、が特に充実し、加えて、その研究分野が多岐に渡るため、専門的な学術書だけでなく、研究の一環として、児童書や絵本、教科書なども収蔵し、実にバラエティに富んだ体系になっています。また毎年約3000冊（棚10段分）を超える新刊書、約500冊の新着雑誌が続々と入ってきます。

新聞は朝日・京都・毎日・読売新聞などの一般紙とともに教育学術新聞、日本教育新聞、図書新聞、The Times educational supplement、The Times higher education supplement といった専門紙も置いています。

閲覧席は全部で20席、個別席は地下に7席、ちょっとした隠れ家的自習室といった趣でとても集中しやすい環境にあります。

毎週火曜日と金曜日は19:00まで開ける夜間開館も行っています。

ぜひ、リニューアルして使いやすくなった教育学部図書室をご利用ください。

学　部　新　入　生　ア　ン　ケ　ー　ト　か　ら

教育学講座　准教授　学生委員長　駒　込　　武

新入生のみなさんは、どのような期待をもって京都大学教育学部に入学したのでしょうか。学部１回生の必修科目「教育研究入門」の時間を利用してアンケートを行いました。質問項目は「京都大学教育学部を受験するに至った理由をお聞かせください」「大学生活に何を期待していますか」「今、不安に感じていることはなんですか」などです。すべて自由記述方式で回答していただきました。ここでは志望動機に関する記述の一端を紹介させていただきたいと思います。

志望動機としては、「教員養成の教育学部ではなく、教育そのものについて考える教育学部に行きたかったから」「心理学に興味があったことと、将来児童や思春期の子達の話を聞いたり手助けをしたりしたいと思っていることから」といった内容が比較的多くの人に共通する内容でした。教員免許を取得することは可能であるにしても、教員養成を目的としているわけではないという本学部の性格がよく理解されていることがわかりました。

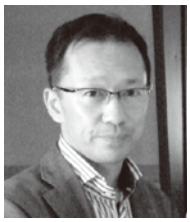
それにしても、高校までに学ぶ教科目の中に、教育学や心理学が存在するわけではないにもかかわらず、どのようにしてこれらの学問領域への関心をはぐくむようになったのでしょうか。この点について示唆を与えてくれたのは、たとえば次のような回答です。「法律にも経済にも興味がなくて、倫理の授業がおもしろかったから」「浪人として、何故受験勉強をしなければならないかということに疑問を持ったから」「自身の不登校を通じて、人間同士のつながりの大切さを知ったため」など。たとえ「学」として学んだわけでなくても、教育や心理については誰もがいわば当事者であり、自らの経験に基づいて問いを発することができます。それは、教育学や心理学の強みかもしれません。

京都大学への憧れがあり、入試科目との関連で教育学部を選んだことを示唆する回答もありました。理系入試が行われていること、地歴が1科目でよいことなど、入試のあり方が進路選択を大きく左右する要因であることをあらためて認識しました。進路選択に悩まれた方には、教育学部に進学した以上は、大学入試制度のあり方も立派な「研究対象」になりうるのだというメッセージをお伝えしておきたいと思います。

最後に付け加えておきたいのは、多くの回答に「アットホーム」というキーワードが記されていたことです。たとえば、「京大の教育学部は雰囲気がアットホームだと聞いていたから」というように。1学年60名近くの学生に、30名近くの教員という本学部の状況は、大学教育のマスプロ化が指摘されて久しい現在にあって「贅沢」な状況といえます。その「贅沢」を大いに活用して、新入生のみなさんが卒業時に「アットホーム」な教育学部に入学してよかったと思えることを願っています。

"Kyoto University Academic Talk" に出演しました

京都大学は、平成24年4月から平成25年3月までの1年間、京都市を中心とする地域ラジオ局「α-Station（アルファステーション）」（FM京都）の協力により、本学のタイアップコーナーである "Kyoto University Academic Talk"（毎週水曜日、15時20分から15時40分まで）を提供し、積極的な社会連携を試みています（担当は渉外部）。毎回1名の教員が出演し、スタジオからの生放送形式で、担当DJとの対話によって、研究に関することをわかりやすく紹介する番組です。このたび、教育学研究科からは、桑原知子教授（4月25日放送）、山名淳准教授（4月18日放送）が出演いたしました。以下、出演順に感想をお寄せいただきました。



教育学講座　准教授　山名　淳

私に与えられた課題は、リスナーの関心や受容を意識しつつ、自分自身の研究についてわかりやすく紹介するというものでした。何をトピックとするか、ということで悩みましたが、最終的に、以前から資料調査を進めてきた『もじゃもじゃペーター』という絵本およびその類似本の解釈をめぐる話を題材にして、〈しつけ〉＝日常の「文明化」から近代教育を考えるというコンセプトで話をさせていただくことにいたしました。

初めての生放送体験で、スタジオの雰囲気からDJの方とのやりとりにいたるまで、何もかもが新鮮でした。当日は、担当DJの方が、適切なタイミングで合いの手を入れ、時計を見ながら内容を調整し、また私が話した事柄をわかりやすく噛み砕いて言い換えてくださいました。

今回の仕事は、私にとっては、ラジオ番組制作現場のいわば「バックヤードツアー」でもありました。放送を終えて、こちらがほっと胸をなで下ろしているのとは対照的に、その後もラジオ番組は休む間もなく進行していきました。適度な緊張感が流れるなかで、スタジオ・ブースの内側と外側で、スタッフの方々がそれぞれの役割をてきぱきとこなしながらも、ラジオ局を後にしようとする私に対して、お別れの声をかけて軽く会釈をしてくださいました。仕事の現場も、他の人生の場面と同じ。去り際に人柄が滲みます。

こうした活動が京都大学および教育学研究科の広報活動と社会連携にいくらか寄与する部分を含んでいたことを、心から願っております。企画段階からお世話になりました渉外部の皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。

（次ページへつづく）

（前ページのつづき）

心理臨床学講座　教授　桑原　知子

いつもよく聞いているα-Stationに自分が出演するとは、思ってもみませんでした。

また、テレビ出演は何度か経験があるものの、ラジオは初めてで、緊張しながらのオンエアとなりました。

教育学研究科、特にコラボレーションセンターの広報と、心理教育相談室という、教育学研究科のなかでも社会に向けて活動している部分をお知らせしようと臨みましたが、どれほどお伝えできたか、また、どれほどリスナーの方の耳ではなく心に届いたかは、自信がありません。

原稿を準備するにあたっては、どんな方が聞いておられるかわかりませんので、とても気をつかいました。心理的な悩みを抱えること、それを相談することについて、誤解がないよう、できればもっと気軽に相談に来てもらえるように、と願って、語りかけたつもりです。

山名先生も書いておられましたが、DJの方やスタッフの方々はほんとうにプロで、安心して話せるようガイドしてくださったので、時間が経つにつれて話が流れだし、もっと話していたい、と思わされたほどでした。京都大学側のスタッフである渉外企画課の小島さんにもたいへんお世話になりました。こういった企画は、市民の方たちと京都大学をつなぐ上で、意味のあるものだと思いました。そこに少しでも貢献できたのであれば幸いです。

諸　記　録

◆2011年11月～2012年4月のおもな出来事

【2011（平成23）年11月】

4日（金） 教育実践コラボレーション・センター主催　北京師範大学ー京都大学大学院生学術交流（北京師範大学教育学部）

13日（日） 教育実践コラボレーション・センター（教育空間創造ユニット）主催　公開シンポジウム「地域社会の教育力ー終焉それとも再生?」上杉孝實氏（京都大学名誉教授）他（京都大学芝蘭会館別館）

15日（火） 第40回京都大学グローバルCOE主催講演会「» Naasé venichmah dans l´œuvre de Levinas «（レヴィナスの作品におけるナアセー・ヴェニシュマー〔われわれは行い、聴く〕）」ジェラール・ベンスーサン教授（ストラスブール大学哲学部）（文学研究科新館）

19日（土） 教育実践コラボレーション・センター（教育空間創造ユニット）主催　第5回野童いなか塾「防災の集い」（旧野殿童仙房小学校）

24日（木） ソウル大学校師範大学教育学科との学術交流協定締結

24（木）・25日（金） 第10回グローバルCOE主催国際シンポジウム「Towards an empirical understanding of cultural, social and evolutionary perspectives in psychological science」（ランカスター大学心理学部）

28日（月） ランカスター大学心理学部との学術交流協定締結（更新）

【2011（平成23）年12月】

1日（木） 第5回グローバルCOE共催シンポジウム「Deep Learningにもとづく大学教育のあり方」（京都大学芝蘭会館別館）

3日（土） 教育実践コラボレーション・センター主催　講演会「南アフリカ共和国における教育ー過去・現在・未来ー」　テンビ・ンデラーネ教授（岡山大学教育学部）（総合研究2号館）

8日（木） 金子勉准教授追悼の集い（教育学研究科本館）

10日（土） 教育実践コラボレーション・センター主催　円卓会議「5年間の成果と今後の発展に向けて」（教育学研究科本館）

11日（日） 第4回グローバルCOE主催シンポジウム「グローバルCOE総括シンポジウム」（百周年時計台記念館）

16日（金） 第1回グローバルCOE主催研究会　サービスサイエンスと文化研究会「サービスサイエンスにおける共創:文化心理学的フレームワークの援用」（稲盛財団記念館）

17日（土） 第11回グローバルCOE主催国際シンポジウム「Culture and Subjectivity in Translation（翻訳における文化と主体／主観性）」（京都大学芝蘭会館別館）

25日(日)−27日(火)　教育実践コラボレーション・センター主催　国際教育フロンティアD　高益民副教授(北京師範大学)(教育学研究科本館)

【2012(平成24)年1月】

7日(土)　第5回グローバルCOE主催シンポジウム「シンポジウム:「こころ」を知る,「こころ」を活かす」(慶應義塾大学三田キャンパス)

【2012(平成24)年2月】

2日(木)　グローバルCOE公開セミナー「京都大学・西江大学 日韓メディア文化研究 国際交流シンポジウム」(百周年時計台記念館)

10日(金)・11日(土)　附属臨床教育実践研究センター主催、教育実践コラボレーション・センター共催　第15回リカレント教育講座「『心の教育』を考える　不登校・多動・非行ー教師への支援」(百周年時計台記念館)

16日(木)　ハラスメント防止に関する研修会「パワハラ、アカハラの防止にむけて」白石社会保険労務士事務所所長白石多津子氏(教育学研究科本館)

18日(土)　山田洋子教授退職記念講演「人生心理学ーイメージ画と語り」

【2012(平成24)年3月】

27日(火)　教育学部同窓会主催　卒業生歓送会(教育学部本館)

24日(土)　教育実践コラボレーション・センター主催　2011年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第7回実践交流会」(教育学研究科本館、総合博物館)

【2012(平成24)年4月】

19日(木)　教育学部同窓会主催　新入生歓迎会(百周年時計台記念館)

20日(金)　ロンドン大学教育研究所との大学間交流協定に基づく講演会「Social Activity Method and Analysis in Educational Research」ポール・ダウリング教授(ロンドン大学教育研究所)(教育学研究科本館)

◆ 平成24年度入試結果

・教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	50	192	186	50	61
	理系	10	36	35	11	
第3年次編入学		10	23	23	9	8

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18	30(8)	30(8)	16(4)	15(4)
		臨床教育学専攻	14	39(1)	39(1)	12	12
	教育科学専攻(専修コース)		10	37	35	10	9
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	0	0	0	0
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)			4	11	11	4	4
博士後期課程編入学			若干名	13(1)	8(1)	2	2

(　　)内の数は外国人留学生で内数

◆ 平成23年度学位授与件数

(H24.3.31現在)

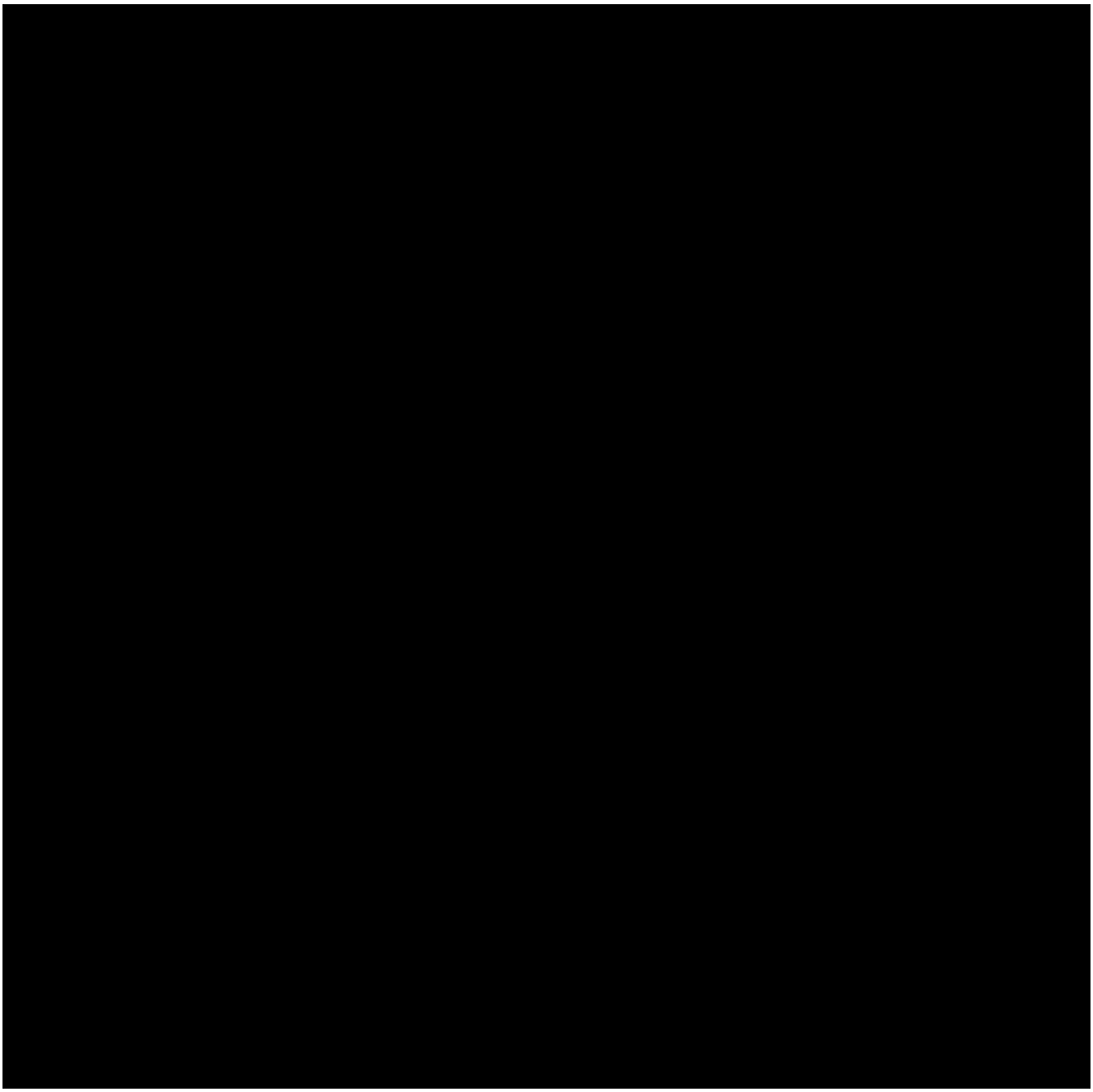
学位名等		授与者数
学士	教育科学科	61
修士	教育科学専攻	26
	臨床教育学専攻	11
博士	課程博士	17
	論文博士	5

◆ 教育職員免許状取得状況

平成23年度(2011)

中学校専修免許状	3
中学校1種免許状	0
高等学校専修免許状	5
高等学校1種免許状	3
特別支援学校1種免許状	0

◆ 人事異動（H23.11.2～H24.5.1）



◆ 科学研究費補助金

24年度

研究種目	研　　究　　題　　目	研究担当者
新学術領域研究	顔表情の認知プロセスに及ぼす遺伝子・環境の相互作用機序に関する認知科学的研究	野村　理朗
基盤研究(A)一般	２１世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成	楠見　　孝
基盤研究(B)一般	Ｅ．ＦＯＲＵＭカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発	矢野　智司
基盤研究(B)一般	教育資源調達手法総動員による教育組織パフォーマンス向上施策の学際的研究	高見　　茂
基盤研究(B)一般	辺境における空間的・社会的移動と教育―奄美諸島の経験を基軸とした比較史的研究―	駒込　　武
基盤研究(B)一般	「女性文化人」の社会的形成に関する歴史社会学的研究	稲垣　恭子
基盤研究(B)一般	精神力動的心理療法家のトレーニングに関する開発的研究－国際比較調査を通して	松木　邦裕
基盤研究(B)一般	ヒトの養育行動における快情動の役割とその進化的基盤	明和　政子
基盤研究(B)一般	青年期メディアとしての雑誌における教育的機能に関する研究	佐藤　卓己
基盤研究(C)一般	「失われた１０年」以後の教育機会とライフコースに関するパネル調査研究	岩井　八郎
基盤研究(C)一般	心理臨床場面における対話の構造	桑原　知子
基盤研究(C)一般	音韻的作動記憶を支える意味記憶とプロソディの相互作用	齊藤　　智

研究種目	研　　究　　題　　目	研究担当者
基盤研究(C)一般	音韻的作動記憶を支える意味記憶とプロソディの相互作用	齊藤　智
基盤研究(C)一般	「活用」を促進する評価と授業の探究	田中　耕治
基盤研究(C)一般	オールタナティヴ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明	西平　直
基盤研究(C)一般	教育空間の変容と自己形成の相互関係についての基礎的研究	前平　泰志
基盤研究(C)一般	東アジア諸国・地域における大学院入学者選抜方法の比較研究	南部　広孝
基盤研究(C)一般	衝動的反応の制御メカニズムの個人差の解明に関する認知科学的研究	野村　理朗
基盤研究(C)一般	セラピストの発話に関する言語論的分析と訓練モデルの構築	大山　泰宏
基盤研究(C)一般	「褒め方・叱り方のタクト」－教育力育成と信頼の場の創出に関する実証研究	鈴木　晶子
基盤研究(C)一般	新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究	山名　淳
基盤研究(C)一般	＜他＞文化理解のための政治教育：アメリカ哲学をめぐる文化横断的対話研究	齋藤　直子
基盤研究(C)一般	途上国の中等学校等の多様化と正規性・非正規性に関する国際比較研究	杉本　均
基盤研究(C)一般	統合的な図書館・図書館史研究の構築	川崎　良孝
挑戦的萌芽研究	「ＮＨＫ青年の主張」における青年文化のメディア社会学	佐藤　卓己
挑戦的萌芽研究	戦後日本におけるアメリカナイゼーションと女性知識人の社会学的研究	稲垣　恭子
挑戦的萌芽研究	専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究－成人教育学の観点から	渡邊　洋子
若手研究(B)	パフォーマンス課題の効果的活用に関する国際比較調査	西岡加名恵

◎寄附金

名　称　・　寄　附　目　的	寄　附　者	担当者
「慢性疾患者に対するチーム医療における臨床心理士の専門性」に関する研究助成	(財)日本臨床心理士資格認定協会 専務理事　大塚　義孝	皆藤　章

◎共同研究

名　称　・　目　的	共同研究相手方	担当者
情動情報の知覚と表出、 および言語情報との発達的関連に関する研究	独立行政法人科学技術振興機構 分任契約担当者　イノベーション推進本部長　北澤　宏一	明和　政子

◆ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成23年度は、平成24年2月16日(木)に開催し、白石社会保険労務士事務所所長　白石多津子氏による「パワハラ、アカハラの防止に向けて」と題する講演が第１会議室であり、教員、事務職員、学生の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

諸　報

◆新任教員・事務職員紹介（「　」内は本人の抱負）

飯吉　透　教授

所属講座：高等教育開発論講座
（高等教育研究開発推進センター）
専　　門：大学教授法

「アメリカの財団や大学で大学教育改善に20年間ほど関わった経験を、是非京大や日本の高等教育の進展に活かしていきたい所存です。よろしくお願いいたします。」

石井英真　准教授

所属講座：教育方法学講座
専　　門：教育方法学

「4年ぶりに戻って参りました。学生・院生指導や教職関連の仕事に取り組みつつ、それを新たな研究の糧にしていければと思います。」

森崎志麻　助教

専　　門：心理臨床学

「4月から着任しました。助教としての様々な仕事や、実践、研究にバランスよくしなやかに取り組んでいけたらと思います。」

宮嶋由布　助教

専　　門：臨床心理学

「『実践』をキーワードに、異なる専門領域の研究者や現場の方々との関係を大事にしながら、取り組んでいきたいと思います。」

桐村豪文　助教

所属講座：比較教育政策学講座
専　　門：教育政策学

「4月に着任致しました。浅学菲才の身ゆえ『先生』などと呼ばれることには慣れていません。今後もたくさんのご指導をお願い致します。」

[redacted]

～ 編集後記 ～

今年の春先に、我が家の全自動洗濯機が故障しました。「あなたがもう少していねいに使っていたら、こんなに早く壊れることはなかったかもしれないね」とは、優しくも厳しい妻の言。「『全自動』のシステムといえども、しっかりと〈人間〉が組み込まれているのだな」、と私。「あなたの責任の話をしているのよ」と、今度は少し語気を強めた妻の苦情。私は、修理をしてくれる専門家の到着をただ待ちわびるだけ……。

システム、〈人間〉、責任、専門家、そして〈私〉。こうしたキーワードの関連性をどのように考えるべきかという問題に、直接的あるいは間接的にふれるような原稿が、今回は多く寄せられました。もちろん、そこでふれられているのは、より大きな社会の、そして世界の次元においての問題です。ただ、そのようなことが日常生活の次元における問題と多くの場合は同型性を帯びていることも、またたしかであるように思われます。

『ニューズレター』第24号をお届けし、教育学研究科の〈現在（いま）〉をお伝えいたします。原稿執筆をお引き受けいただいた方々、また資料をご提供いただいた方々に、この場を借りて感謝申し上げます。（JY）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　角野　善宏　教授（臨床心理実践学講座）
委　員　前平　泰志　教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　山名　　淳　准教授（教育学講座）
委　員　佐藤　卓己　准教授（生涯教育学講座）
委　員　吉井　　晃　事務長
委　員　谷川嘉奈子　総務掛長
委　員　片山　　正　教務掛長

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003